

YBA & BEYOND

British Art in the 90s from the Tate Collection

テート美術館 | YBA & BEYOND
世界を変えた90s英国アート

ヴォルフガング・ティルマンス《ザ・コック(キス)》2002年

© Wolfgang Tillmans, courtesy Maureen Paley, London; Galerie Buchholz, Berlin/Cologne; David Zwirner, New York/Hong Kong

展覧会 概要

常識は覆される。 世界が目撃した、 その衝撃がここに

本展は、1980年代後半から2000年代初頭にかけて制作された英国美術に焦点を当てる企画です。サッチャー政権時代（1979－90年）を経験して失業率が悪化するなど緊張感漂う英国社会では、既存の美術の枠組みを問い、作品の制作や発表において実験的な試みをする作家たちが数多く登場しました。当時「ヤング・ブリティッシュ・アーティスト（YBA）」と呼ばれた作家たち、そして、彼らと同時代のアーティストたちは、大衆文化、個人的な物語や社会構造の変化などをテーマとし、絵画、彫刻、写真、映像、インスタレーションなど多様な手法を用いて独創的な作品を発表してきました。約60名の作家によるおよそ100点の作品を通じて、90年代の英国美術の革新的な創作の軌跡を検証します。



ジュリアン・オビー 《ゲイリー、ポップスター》1998－99年

© Julian Opie

YBAとは

1988年7月、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジで学んでいたダミアン・ハーストは、ロンドン東部の倉庫街で学生や卒業生の作品を発表する展覧会「フリーズ」展を企画しました。ハーストや同世代の作家たちは、全く新しい視点で素材を選び、制作し、発表の機会を積極的に開拓していったのです。1992年に『アート・フォーラム』誌上で美術史家のマイケル・コリスは彼らを「ヤング・ブリティッシュ・アーティスト(YBA)」と呼び、サーチ・ギャラリーで開催された同名の展覧会によりYBAという言葉は一般に広がっていきました。YBAの作家たちの自由な活動によって、90年代の英国のアートシーンは世界的な注目を集めるようになったのです。



ダミアン・ハースト《後天的な回避不能》1991年

Photographed by Prudence Cuming Associates © Damien Hirst and Science Ltd. All rights reserved. DACS/Artimage 2025

本プレスリリース掲載作品のうち★以外はテート美術館の所蔵作品

テート美術館とは



テート・ブリテン Photo © Tate



テート・モダン Photo © Tate

テート美術館は、英国を代表する国立美術館のひとつであり、英国政府が所有する1500年以降の英国美術、および世界各地の近現代美術のコレクションを収集・保存・公開しています。国内には4つの美術館を展開しており、その第一の拠点であるテート・ブリテンは、ロンドンのミルバンクに位置し、1897年の開館以来、英国美術のナショナル・コレクションの本拠地となっています。最大規模を誇るテート・モダンは、ロンドン中心部のテムズ川沿いにある旧発電所を再利用し、2000年に開館しました。近現代美術を専門とする美術館としては、世界で最も多くの来館者を誇る施設です。

テート美術館のキュレーター

Gregor Muir

グレゴール・ミューア

テート美術館にとって初めての「90年代の英国美術」を振り返る展覧会を、東京と京都の名高い美術館で開幕できることを、大変光栄に思います。1990年代の英国は、政治・経済・文化の面で大きな変革を経験した時代でした。そうした社会状況のなかで、多くのアーティストたちが新たな表現や探求に挑戦していきました。来場者の皆さまにとって、本展が、変化に富む英国社会の中で生まれた作品や作家の精神の神髄に触れる機会になればと願っています。変化の著しい現代においてもなお、この時代の芸術は重要な意味を持ち続けています。

●プロフィール

グレゴール・ミューア は、テート美術館のコレクション部門ディレクター兼キュレーターとして、英国のみならず国際的な視野で同館のコレクションの発展を牽引しています。これまで、テート美術館をはじめ、ICA(ロンドン)、ハウザー&ワース、そして自身が1997年に設立したLUXギャラリーなどで活動し、現代美術における国際的な貢献を果たし、重要な役割を担ってきました。

1990年代初頭から中盤にかけては、ジェイク&ディノス・チャップマン、ケリス・ウィン・エヴァンス、ゲイリー・ヒューム、サム・テイラー＝ウッドらを取り上げる先駆的なビデオプログラムやグループ展を数多く企画しました。



Helen Little

ヘレン・リトル

1990年代において英国のアートシーンと深いつながりを持っていた日本で本展を開催できることを、大変うれしく思います。展覧会の企画を進める中で、多くのアーティストが日本で作品を発表したり、日本から創作のインスピレーションを得たりするなど、両国の間に数多くのつながりがあることを改めて確認することができました。英国の歴史の一時代を従来の美術史的な枠組みを越えて掘り下げ、英国各地で展開されたアーティストたちの活動とその成果を一つの物語として描き出すことは、とても意義深く充実した経験でした。来場者の皆さまにも、地域間のつながりや、変革と創造に満ちたあの時代の空気を感じ取っていただけたら幸いです。

●プロフィール

ヘレン・リトルは、20世紀および現代の英国美術を専門とし、現在はテート・ブリテンの現代美術部門のキュレーターを務め、また、テート美術館の国際プログラムにも積極的に関与しています。これまでターナー賞展をはじめ、1980年代の英国における写真表現を総覧する展覧会など、批評家から高い評価を得た企画を多数手がけてきました。また、デイヴィッド・ホックニーやクリス・オフィリといった世界的アーティストの大規模な回顧展も企画・監修するなど、英国美術界において重要な役割を果たしています。キュレーターとしての活動に加え、近現代の英国美術に関する書籍や展覧会カタログの編集・執筆にも取り組んでおり、美術史的な研究と実践を架橋する活動を展開しています。

みどころ



英国美術の世界的中心地 テート発の“UK90's”展

テート美術館が自ら編んだ、
YBAと90年代英国アートの決定版。

伝説の

スターアーティストの競演

ダミアン・ハースト、ジュリアン・オピー、ルベyna・ヒミド、
スティーヴ・マックイーン、トレイシー・エミン、
ヴォルフガング・ティルマンスなど、世界のアート史に
名を刻むアーティストの作品が集結。



音楽×サブカル× ファッションの熱狂と 呼応するアート

UKカルチャーが溢れた黄金期の息吹。
90年代の英国で起こったアート、音楽、
ファッションの革命的ムーブメントの核心を
体験できる、唯一無二の展覧会です。

本展は、90年代の英国美術の独自性を
6つのテーマを通じて検証し、
各章をつなぐ重要な作品を「スポットライト」として紹介します。

[序章] フランシス・ベーコンからブリットポップへ

[第1章] ブロークン・イングリッシュ:ニュー・ジェネレーションの登場

[スポットライト] ハンズワースの歌

ブラック・オーディオ・フィルム・コレクティヴ

[第2章] おおぐま座:都市のイメージをつなぐ

[第3章] あの瞬間^{とき}を共有する:音楽、サブカルチャー、ファッション

[スポットライト] なぜ私はダンサーにならなかったのか

トレイシー・エミン

[第4章] 現代医学

[スポットライト] 熊

スティーヴ・マックイーン

[第5章] 家という個人的空間

[スポットライト] コールド・ダーク・マター:爆発の分解イメージ

コーネリア・パーカー

[第6章] なんでもないものから何かが生まれる:身近にあるもの

[スポットライト] 王国への入り口

マーク・ウォリンジャー

序章

フランシス・ベーコンから
ブリットポップへ

PREFACE: FROM BACON TO BRITPOP



フランシス・ベーコン 《1944年のトリプティック（三幅対）の第2ヴァージョン》1988年

Photo: Tate © Estate of Francis Bacon. All rights reserved. DACS & JASPAR 2025 G3928

フランシス・ベーコン(1909-92年)は、20世紀美術史において最も重要な画家の一人です。抽象絵画が国際的な展開を見せた時代に、肉体の表現を徹底して追究し、独自の道を貫きました。1944年に制作された《ある磔刑の基部にいる人物像のための三部作》(テート美術館蔵)では、獣と人間が混ざり合った生き物が叫んでいる姿を描き、それは発表当時、戦争の恐怖を映すものとして衝撃をもって受け止められました。その44年後に描いた《1944年のトリプティック(三幅対)の第2ヴァージョン》でベーコンは同じ主題に向き合い、背景の色をオレンジから血液を思わせる濃厚な赤に変更しました。東西冷戦が終焉を迎える時代に描かれた本作品は、当時の若い作家たちが、すなわち90年代にロンドンやマンチェスターで発生した音楽ムーブメントであるブリットポップが象徴するような新世代の文化の担い手たちが敏感に感じ取っていた社会の変化と混迷を象徴的に示しています。

第1章

ブロークン・イングリッシュ：
ニュー・ジェネレーションの登場

BROKEN ENGLISH: A NEW GENERATION



ギルバート&ジョージ《裸の目》1994年

Photo: Tate © Gilbert & George

1980年代後半、1979年より続いていたサッチャー政権が推進した新自由主義経済の結果、格差が拡大し、英国社会には揺らぎの感情が広がり、1991年に開催された「ブロークン・イングリッシュ」展は時代の空気を捉えたものでした。そして、こうした状況の中アートシーンに登場した作家たちは、マスメディアや大衆文化に想を得ながら「英国らしさ」を鋭く批評する視点を表明したのです。その一人であるダミアン・ハーストは、《後天的な回避不能》(1991年)で、煙草の吸殻と灰皿をオフィス空間に置いてガラスケースで密閉し、現代社会において避けることのできない死とは何かを問うたのです。

ハーストの世代を特徴づける積極的に規範を逸脱しようとする姿勢は、1960年代から活動していたギルバート&ジョージの制作を貫くものでもありました。1980年代後半から90年代にかけてのエイズ危機に直面した彼らは、自らの身体を露わにすることで性をめぐる政治的な状況に向き合う姿勢を明確にしたのです。

同じ時期、カリブ海地域、南アジア、そして、アフリカにルーツを持つ作家たちもアイデンティティの問題を作品の制作を通じて鋭く捉えるようになっていきました。ルベイナ・ヒミドは、移民として生きる黒人女性を描き、歴史の中で築かれる関係が現代に生きる人々の生き方や帰属意識をどのように形作るのかを考察しています。



ルベイナ・ヒミド

《二人の間で私の心はバランスをとる》1991年

Photo: Tate © Lubana Himid, Courtesy Hollybush Gardens and Greene Naftali

スポットライト

ハンズワースの歌

HANDSWORTH SONGS



ブラック・オーディオ・フィルム・コレクティヴ
《ハンズワースの歌》1986年

© Smoking Dogs Films, Courtesy Smoking Dogs Films and Lisson Gallery

ブラック・オーディオ・フィルム・コレクティヴは、1982年にジョン・アコムフラーをはじめとする社会学、心理学、美術の学生たちによって結成されました。1980年代の英国社会の混乱と対峙する中で、ポストコロニアル理論の影響を受けた彼らはドキュメンタリーの形式を用いながら英国に暮らす黒人の経験を語る実験的な映像作品を発表しました。本作品は、黒人のコミュニティに対する不当な扱いを背景として1985年にバーミンガムのハンズワース地区で発生した暴動をきっかけに制作され、文化系番組で知られる英国のテレビ局チャンネル4の連続特集の一環として放映されました。それは、音と映像を重層的に組み合わせ、ドキュメンタリーと実験映画の手法が融合する映像詩であり、見る者に多様な理解と想像を促します。

第2章

おおぐま座：
都市のイメージをつなぐ

THE GREAT BEAR: PICTURING THE CITY



サイモン・パターソン
《おおぐま座》1992年

Photo: Tate © Simon Patterson and Transport for London



レイチェル・ホワイトリード
《A: クラブトン・パーク・エステート、マンデヴィル通り、ロンドン E5;
アンバーゲート・コート; ノーバリー・コート, 1993年10月》1996年

Photo: Tate © Rachel Whiteread

1990年代初頭には未完成の建築物が目立ち、また、ジェントリフィケーションにより行き場を失う人が増加しました。それは若いアーティストたちにとって身近な光景であり、創作の着想源となっていました。

サッチャー政権の住宅政策とそれによって人々が家を失うことに関心を抱いたレイチェル・ホワイトリードは、ロンドン東部のハックニー地区にあった高層集合住宅の取り壊しを記録した一連の写真作品を制作しました。それは、経済的な状況下で消滅する存在のメタファーとして、制作から30年以上たった現在においても普遍的な意味を持っています。ジリアン・ウェアリングの《ダンシング・イン・ペッカム》は、ロンドン南部のショッピング・センターで作家自身が躍る姿を撮影した映像作品です。公共の場でダンスに没頭する作家、そして、それに困惑したり、無関心だったりする人々の姿は、都市空間におけるパブリックとパーソナルの境界を、ユーモアを交えて私たちに問いかけています。この章では、本展出品作のサイモン・パターソンの《おおぐま座》(1992年)が象徴する都市への新たな視点を示す作品を紹介します。

ジリアン・ウェアリング

《ダンシング・イン・ペッカム》1994年★

© Gillian Wearing, courtesy Maureen Paley, London, Regen Projects, Los Angeles and Tanya Bonakdar, New York.



あの瞬間^{と き}を共有する：
音楽、サブカルチャー、ファッション

[illegible]

A photograph of a person wearing a blue bucket hat and an orange long-sleeved shirt, captured in a dynamic pose as if dancing or performing. The background is dark and out of focus, suggesting a nighttime outdoor event with other people and lights visible in the distance.

格差が広がり、不安感が漂う時代において、雑誌や広告のヴィジュアル面での雑多性と訴求力、音楽の解放感、アイデンティティを表現する服飾文化の多様性は、かけがえのない一瞬を捉えようとする若いアーティストたちの意思や社会的なつながりに対する関心と交差し、その関係は1990年代における英国美術の国際的発信力の源となっていました。

こうした文脈の中で最も重要な作家の一人ジュリアン・オピーは、1997年から実在の人物たちの写真を用い、シンプルで平面的な肖像画に取り組むようになりました。とりわけ、ブラーのベスト盤アルバム（2000年に発表）のジャケットデザインは、広告と美術の境界を越え、世界的に知られることになりました。本展出品の《ゲイリー・ポップスター》（1988-99年）は、架空のポップ・アイコンをイメージした作品です。限られた要素によって作られる存在しない著名人のイメージは、「個性を示す情報とは何か」を私たちに問いかけています。

ストリート文化を紹介する雑誌『i-D』や『ザ・フェイス』でロンドンやベルリンといった都市のクラブシーンを捉えた作品を発表し、注目を集めるようになったヴォルフガング・ティルマンスは、写真のプリントや展示方法においても実験的なアプローチを重ねている作家です。モデルでユース・カルチャーの象徴的人物であるケイト・モスを被写体にした《座るケイト》やロンドンのクラブで撮影された《ザ・コック（キス）》（2002年）を含めたティルマンス独自の写真インスタレーションは、見る者に時代の感覚を鮮烈に呼び起こします。

ジェレミー・デラーの《世界の歴史》は、炭鉱労働者の連帯を示すプラスバンドと1980年代後半から90年代にかけて若者たちの間で流行したアシッド・ハウスをフローチャートで結びつけています。展示の度に美術館の壁に描かれるダイナミックかつ精緻に設計されたドローイングは、音の文化と社会との密接なつながりを改めて気づかせてくれます。

また、アンダーグラウンドの音楽やクラブ・カルチャーに強い関心を持つマーク・レッキーは、既存の映像を組み合わせて編集するサンプリングの手法を用いて《フィオルッチは私をハードコアにした》を制作しました。アナログとデジタル、過去と現在、個人的記憶と歴史的な出来事を織り交ぜ、1970年代から1990年代にかけての英国のダンスカルチャーの変遷を扱っています。

スポットライト

なぜ私はダンサーにならなかったのか

WHY I NEVER BECAME A DANCER



トレイシー・エミン

《なぜ私はダンサーにならなかったのか》1995年

© Tracey Emin

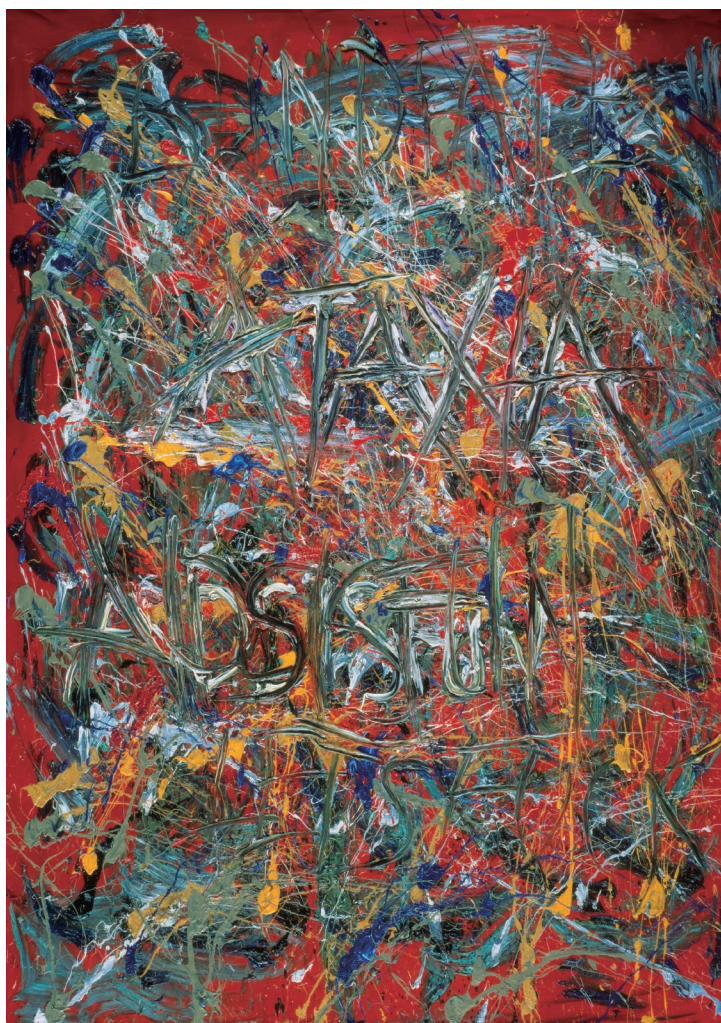
トレイシー・エミンの作品において、個人的な経験の告白は極めて重要な要素であり、これまで語る手段を持たなかった、あるいは持てなかった女性たちの存在に光を当て続けるフェミニズムの課題と共鳴し、約40年間のキャリアを積み重ねた現在においても初期のアプローチは今なお強いアクチュアリティを維持し続けています。本作品は、作家の告白と共に語られるビデオ作品です。映像の前半ではエミンが育った海辺のリゾート地マーゲイトの風景が映し出され、彼女は1970年代後半にティーンエイジャーだった頃の苦しみを語っています。そして、作品の後半ではエミンはディスコ・ソングに合わせて楽しそうに踊り出します。それは、過去の苦い経験への勝利を示しているのです。エミンが受けた屈辱の告白は、時に社会の中で自らの尊厳が脅かされがちな思春期の女性たちにとって多くの共感を呼ぶ内容となっています。

第4章

現代医学

MODERN MEDICINE

1990年代の作家たちにとって、医学の発展とヘルスケアは大きな関心事の一つでした。薬への信頼と副作用、身体へのコントロールが行われる医療現場もアーティストたちの主題となっていました。そして、HIVの感染拡大とエイズによる死者の増加は、一つの病の流行の枠組みを超え、人々の間に恐怖、怒り、抵抗の感情を生み出し、多くの作家たちがこの病との関係から作品を制作しました。映画監督であり同性愛者の権利獲得を目指すアクティヴィストとしても知られるデレク・ジャーマンもその一人です。スレード美術学校で絵画制作を学んだ経歴を持つジャーマンは1990年から1992年にかけてメディアにおける同性愛とエイズの表現を考察した44点の絵画シリーズ〈クィア〉を完成させました。HIV感染による神経組織への障害が顕著になった頃に描かれた《運動失調—エイズは楽しい》は、一見鮮やかな色彩をダイナミックに使用した抽象絵画のようです。しかし、よく見ると画面には作品タイトルと同じ文言がはっきりと刻まれています。そのユーモアを交えたメッセージには、エイズに関連した同性愛嫌悪に直面したジャーマンの抵抗が示されているのです。



デレク・ジャーマン

《運動失調—エイズは楽しい》1993年

Photo: Tate © The estate of Derek Jarman. Courtesy of The Keith Collins Will Trust

スポットライト

熊

BEAR

スティーヴ・マックイーン
《熊》1993年© Steve McQueen. Courtesy the artist and of Thomas Dane Gallery, London

スティーヴ・マックイーンは2013年に公開した「それでも夜は明ける」で米国アカデミー賞の作品賞を受賞するなど、今日ではハリウッドの第一線で活躍する映画監督ですが、大学では美術を学び、ビデオ・インスタレーション、彫刻、写真に取り組み、複数の美術館で個展を開催するなど、若くしてアートシーンでの評価を確立したことも知られています。その初期の代表作《熊》は、一切の音を排した白黒の映像作品です。展示の度に大きなスクリーンと外界の光を遮断する空間が用意され、そうした仕掛けは観客を作品世界に没入する参加者の一人に位置づけます。画面上では、二人の裸の黒人男性（そのうち一人は作者自身）が、揺れ動きながらじゃれ合い、互いに挑発し、戯れと攻撃の境界の曖昧な行為が展開されます。人間の肉体の動きにダイナミックに迫るモノクロームの映像は、人種、同性愛の欲望、暴力といった問題を見る者に喚起します。

第5章

家という個人的空間

AT HOME: PERSONAL SPACES



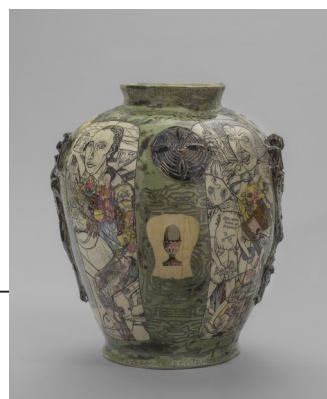
サラ・ルーカス
《煙草のおっぱい(理想化された喫煙者の椅子II)》1999年
© Sarah Lucas. Courtesy Sadie Coles HQ London

私的な空間を政治的な場と捉えた作家たちにとって、家族関係や個人のアイデンティティも考察すべき重要な問題であり、家庭の風景に潜む暴力や人間関係のひずみ、そして家父長制が個人を抑圧するジェンダーバイアスに正面から向き合う作品は、現代の私たちにも強い共感と深い内省を促すものとして存在しています。

性に関する規範に疑問を呈し、執筆活動、メディアへの出演も行っている 그레이ソン・ペリーは、子ども時代に両親や継父との関係で苦しみ、そうした経験に関連する作品を数多く制作してきました。陶製の花瓶の表面に装飾を施した《私の神々》では、児童虐待など、現代イギリス社会における身近でありながら陰惨なドラマを扱っています。

サラ・ルーカスもジェンダーやセクシャリティの既成概念に問いを投げかける作品を発表している作家です。《煙草のおっぱい(理想化された喫煙者の椅子II)》は、煙草を集めて作った球体に黒いブラジャーを着せ、それは女性の上半身をはっきりと想像させます。作品タイトルの「おっぱい(tits)」は、当時のタブロイド紙に頻繁に登場したスラングであり、性の消費とステレオタイプに対する痛烈な皮肉を込めています。

그레이ソン・ペリー
《私の神々》1994年
© Grayson Perry





コールド・ダーク・マター： 爆発の分解イメージ

COLD DARK MATTER: AN EXPLODED VIEW



コーネリア・パーカー

《コールド・ダーク・マター：爆発の分解イメージ》1991年

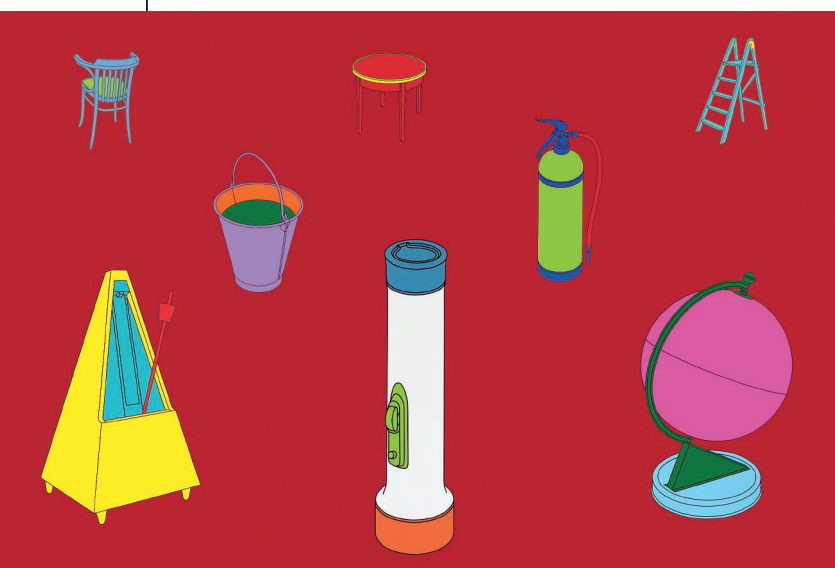
Photo © Tate © Cornelia Parker Courtesy Frith Street Gallery

本作品は、食器や楽器、レンガといった日常的に目にするものを大量に集め、時に変形させ、天井から吊るす彫刻作品で知られるコーネリア・パーカーの初期の代表作です。作品制作にあたり、作家はイギリス陸軍に物置小屋を爆破することを依頼しました。その残骸を一つ一つ拾い上げ、照明を落とした密閉された空間の天井から紐で吊るし、中央に強い光を放つ電球を設置しました。このプロセスによって、小屋の断片は空間に浮遊しているように見え、爆発の瞬間を切り取ったかのようなイメージが作り出されるのです。パーカーにとって物置小屋とは、本来の機能的な意味を超えて、秘密や空想を可能にしてくれる場所、使わないけれど残しておきたい物が抱える記憶を蓄積する場でもあるのです。爆破はそうした存在の消滅を意味すると言えるかもしれません。しかし展示された作品は、まさにその爆破の過程を経て生まれる新たな世界のイメージとも考えられます。パーカーは、この重力から解放された「彫刻」で、破壊と創造を同時に達成しているのです。

第6章

なんでもないものから
何かが生まれる：身近にあるもの

SOMETHING FROM NOTHING: THE QUOTIDIAN OBJECT

マイケル・クレイグ＝マーティン
《知ること》1996年

© Michael Craig-Martin. Courtesy the artist and Gagosian



1990年代の多くのアーティストは物質文化に強い関心を持ち、日常生活で目にする脆弱で儚いものを作品の素材として積極的に取り入れました。こうした取り組みは、1980年代までのコンセプチュアル・アートがミニマルでスケールの大きなものに注目したことに対する反動でもあり、そのアプローチでは現代生活の微妙なニュアンスを捉えきれないと考えたのです。

鮮やかな色彩が目を引くマイケル・クレイグ＝マーティンの《知ること》は、見慣れたものを異なる視点で見ることを促す絵画作品です。はしごは消火器より小さく、さらに消火器は懐中電灯より小さく描かれるなど、家庭用品を実際の大きさとは逆転した大きさに配置しています。クレイグ＝マーティンはロンドン大学ゴールドスミス・カレッジで長く教鞭を執り、YBAの作家たちにとって指導者的な役割を果たしました。既成概念を疑う姿勢を重視する制作プロセスは、その教え子の世代に大きな影響を与えたのです。トレイシー・エミンの《モニュメント・バレー（壮大なスケール）》は、作家が1994年に当時恋愛関係にあった作家でキュレーターのカール・フリードマンと米国を旅した際に撮影された写真作品です。エミンは祖母から受け継いだ布張りの椅子に腰かけ、本を読んでいます。エミンは親密な人間関係とそれが残すものを用いて、その価値を作品の主題としているのです。

トレイシー・エミン
《モニュメント・バレー（壮大なスケール）》1995-97年
Photo: Tate © Tracey Emin

スポットライト

王国への入り口

THRESHOLD TO THE KINGDOM



マーク・ウォリンジャー
《王国への入り口》2000年
© Mark Wallinger Courtesy of the artist

マーク・ウォリンジャーは、一貫して国民のアイデンティティの概念、それを形作るプロセスや象徴の役割を問い続けている作家です。ロンドン・シティ空港の到着ゲートをスローモーションで捉えた本作品では、イタリア・ルネサンス期の作曲家グレゴリオ・アレグリが旧約聖書詩篇第51篇をもとに作曲した合唱曲「ミゼレーレ」が背景の音楽として選ばれています。作家は、空港を国境に接する地帯、かつ現実世界の王国(英国)への入り口として捉え、その場所の持つ政治的、または象徴的な意味を浮き彫りにします。この作品が制作された2000年、英国のみならず世界中の現代美術の収集と研究、そして公開を目指す国際的な芸術の発信拠点としてテート・モダンが開館しました。ミレニアムを迎え、新しい時代が幕を開ける中発表された本作品は、制作から四半世紀が経ち、国際政治の舞台上で大きな分断が進む状況下でアイデンティティと帰属への考察を改めて促す重要な意義を持っています。

British Art in the 90s from the Tate Collection

※掲載順:ファーストネームABC順

クルーズ YBA& BEYOND 年表

British Art in the 1990s from the Tate Collection



スタート

1980年代後半：伝説の始まり

ART YBAの胎動と、もう一つの物語

ゴールドスミス・カレッジの指導者マイケル・クレイグ＝マーティンの下で学んだダミアン・ハーストら若手アーティストが自主企画「フリーズ(Freeze)」展(1988)でアートシーンに登場する一方、ヘイワード・ギャラリーではアフリカ、アジア、カリブ系の作家に焦点を当てた画期的な展覧会「もう一つの物語(ジ・アザー・ストーリー)」(1989)が開催され、英国美術の多様性を示した。

CULTURE & SOCIETY:

失業率の上昇やエイズの流行といった課題を抱えていた保守党政権下の英国では、アシッドハウスがカルチャー全般を席巻。さらに、アシッドハウスとインディロックが融合したマッドチェスター、シューゲイザー、アシッドジャズといったムーブメントも音楽界を騒がせた。

1990年：新しい才能の胎動

ART 勢いを増す、YBA「現代医学」展

「フリーズ」展の成功を受け、ダミアン・ハーストらが企画。使われなくなったビスケット工場「ビルディング・ワン(Building One)」を舞台に、より大規模なグループ展を開催。

CULTURE & SOCIETY:

全国民から一律同額の税金を徴収する人頭税導入を受けて全国で抗議行動が起きる中、求心力を失ったマーガレット・サッチャーが首相を辞任。ジョン・メージャーが新たに首相に就任した。日本でも人気を誇ったコメディ番組『ミスター・ビーン(Mr. Bean)』の放映が始まったのもこの年で、主演のローワン・アトキンソンと番組を考案したのは、のちに映画界に進出して多数のヒット作を手掛けるリチャード・カーティス。

1992年：巨匠の死と、新世代の台頭

ART 新世代の戴冠「ヤング・ブリティッシュ・アーティスト I (Young British Artists I)」展

『アートフォーラム』にてマイケル・コリスがYBAという呼称を使用する一方、サーチ・ギャラリーでハーストの「サメ」が初公開され、社会現象に。この展覧会で「YBA」の名は不動のものとなる。同年、彼らに影響を与えた巨匠フランシス・ベーコンが死去し、世代交代を印象付けた。

CULTURE & SOCIETY:

イングランドにおけるサッカーの一部リーグ、プレミア・リーグが開幕し(1992～93年シーズンはマンチェスター・ユナイテッドが優勝)、英国とアイルランドのミュージシャンを対象に、ジャンルを問わず良質のアルバムに贈られる音楽賞マーキュリー・プライズが創設される。プライマル・スクリームの「スクリーマデリカ」が初代受賞作に。

1991年：衝撃、アート界を走る

ART アートシーンの表舞台への進出と衝撃的な始まり

サーペンタイン・ギャラリーでの「ブローケン・イングリッシュ」展でYBAの作家たちが公的な場で発表する一方、コレクターのチャールズ・サーチがダミアン・ハーストにホルミン漬けされたサメの作品(生者の心における死の物理的不可能性)の制作を依頼し、YBAへの注目が一気に高まる。そして、アニッシュ・カプアが英国美術界の最高榮譽であるターナー賞受賞。この年からターナー賞の受賞者が50歳未満の作家に限定され、また候補者の作品がテート美術館で展示されるようになった。これ以降、ターナー賞は1990年代に台頭する新世代のアーティストやコンセプチュアル・アートの展開と結びつくようになっていった。

CULTURE & SOCIETY:

90年代のダンス・カルチャーを牽引したロンドンのクラブ、ミニストリー・オブ・サウンドがオープンし、アート雑誌『フリーズ(Frieze)』、ファッション&カルチャー雑誌『デイズ&コンフューズド(Dazed & Confused)』(のちの『Dazed』)、ホームレスの人びとの自立をサポートする『ビッグ・イシュー』など、いずれも大きな影響力を持つことになる雑誌が相次いで創刊。他方でクイーンのフレディ・マーキュリーがエイズによる合併症で死去し(享年45歳)、社会に暗い影を落とした。

1993年：“家”がアートに。 ターナー賞受賞作となる

ART レイチェル・ホワイトリード、《ハウス》でターナー賞受賞

取り壊し予定の家屋をコンクリートで型取りした作品《ハウス》を発表。公共空間におけるアートのあり方を問い、物議を醸しながらも、女性として初めてターナー賞を受賞する。その後、ポップバンドKLF主宰のK財団が「今年のワースト・アーティスト」賞をホワイトリードに贈る。

CULTURE & SOCIETY:

スウェードのブレット・アンダーソンが表紙を飾る音楽誌『セレクト』4月号に、“ブリットポップ”という言葉が初めて登場。UKロックの復権を唱える一方、ボイイズグループのティク・ザットが3曲を全英チャート1位に送り込んでブレイクした。美の基準にも“ヘロイン・シックス”と呼ばれる新たな流れが浮上し、スキニーなモデルが人気を集める。テート・ギャラリーの別館テート・セント・アイヴスの開館も話題に。

1994年： UKカルチャーの黄金期へ

ART YBA、世界へ

YBAのアーティストたちが、サーチ・ギャラリーでの展示をきっかけに、国際的な舞台へ進出。

CULTURE & SOCIETY:

サード・アルバム『パークライフ』を発表したブラーの先導でブリットポップが本格化すると共に、新たに開設された海賊ラジオ局RinseFMがドラムンベースやUKガレージを発信し、ダンス・ミュージックにも新たな潮流が。一方で英国政府が刑事司法及び公共秩序法を制定し、レイヴ文化の取り締まりを始めた。また、同性愛者であることを公言していた映像作家デレク・ジャーマンがエイズで亡くなったこの年、ゲイ雑誌『アディチュード』が創刊されると共に、英国国教会が初めて女性の司祭の就任を認めた。

1996年：ポップカルチャーの爆発

ART 多様化する表現

サラ・ルーカスが目玉焼きを使ったセルフポートレートでジェンダー規範を問い、ヴォルフガング・ティルマンスが時代のユースカルチャーを写真に収める。ダグラス・ゴードンがターナー賞を受賞。

CULTURE & SOCIETY:

オアシスが2日間に25万人を集める野外コンサートを行なって変わらぬ人気を見せつけるが、スパイス・ガールズという新たなスターが出現。ファッション界ではアレキサンダー・マックイーンがジバンシィ、ジョン・ガリアーノがクリスチャン・ディオールに抜擢され、英国人が相次いでパリのオートクチュール・メゾンのクリエイティブ・ディレクターに就任。映画「トレインスポッティング」も大ヒットして、英国発カルチャーが世界を席巻する。

1995年：アート界の寵児、頂点へ

ART ダミアン・ハースト、ターナー賞受賞

ホルマリン漬けの牛と子牛の作品で、ついにダミアン・ハーストがターナー賞を受賞。この時代の英国アートシーンの隆盛を象徴する出来事となった。

CULTURE & SOCIETY:

ブライアン・イーノが起動音を手掛けたWindows 95が発売され、デジタル時代の幕が開けたこの年、話題を独占したのはブラーVSオアシス対決の激化。8月に同時にシングルをリリースして全英ナンバワン座を競い、ブリットポップ・ブームが過熱した。同時に、タブラ奏者／プロデューサーのタルヴィン・シがクラブ・イベント“アノーカ”を始め、アジア系英国人ミュージシャンたちによる独自のサウンドを世に送り出す。また、英国によるスコットランド侵奪行為を批判した、アレクサンダー・マックイーンの「ハイランド・レイブ」コレクションが話題に。

1997年：一大センセーション到来

ART アート界の衝撃とカルチャーの交差

ターナー賞の候補者が史上初めて全員女性となり、ジリアン・ウェアリングが受賞。そしてYBAを代表する展示となったロイヤル・アカデミーの「センセーション」展が社会現象となる一方、ジェレミー・デラーはアシッドハウスをプラスバンドで演奏する《アシッド・プラス》を発表。英国の伝統とサブカルチャーが作品の中で交差した。

CULTURE & SOCIETY:

香港の中国返還、ウェールズ公妃ダイアナの事故死に加えて、労働党による18年ぶりの政権奪還が英国社会に大きなインパクトを与え、新首相のトニー・ブレアは“クール・ブリタニア”の旗印の下に英国発のカルチャーの振興を国策に取り入れる。レディオヘッドの名盤「OK コンピューター」の発売、J・K・ローリング著のハリー・ポッター・シリーズ第一弾『賢者の石』の出版、異色の子供向けテレビ番組「レタヒーズ」の放送も注目を集める。

1998年：物議を醸すアートの力

ART クリス・オフィリ、ターナー賞受賞

象の糞を使った聖母マリアの絵画で、クリス・オフィリがターナー賞を受賞。多様な文化的背景を持つアーティストの登場と、宗教や伝統をめぐる表現が再び大きな議論を呼んだ。

CULTURE & SOCIETY:

前年のポール・マッカートニーに続いてエルトン・ジョンがナイトの称号を授与され、のちにふたりの後を継いで英国を代表するアーティストへと成長する、元デイク・ザットのロビー・ウィリアムスがシングル「ミレニアム」で初の全英ナンバワンを獲得。他方、英国とアイルランドの間でベルファスト合意（聖金曜日協定）が結ばれ、長く続いた北アイルランド紛争に終止符が打たれた。英国で死刑が完全に廃止されたのもこの年。

2000年：テート・モダン開館

ART 時代を象徴するアートと、新たな拠点

2000年、ジュリアン・オビーがブラーのベスト盤ジャケットを手掛け、英国コンテンポラリーアートとブリットポップが融合。同年に写真家として初めてヴォルフガング・ティルマンスがターナー賞を受賞する。そして現代アートの新たな殿堂テート・モダンが開館。現在に至るまでYBAの作家、そして彼らと同時代の重要な作品を数多く収蔵。

CULTURE & SOCIETY:

21世紀へ。ブリットポップが一時代を築き、その熱狂は新たな音楽やカルチャーの胎動へと繋がっていく。

1999年：私のすべてがアートになる

ART アートの多様性とターナー賞

候補者の一人であったトレイシー・エミンが、精神的に不安定な状態で4日間過ごした自身のベッドを、コンドームや下着、空の酒瓶といったゴミと共にそのまま作品とした《マイ・ベッド》を「ターナー賞展」に出品し、論争を呼ぶ。一方、受賞者は、映像作家のスティーヴ・マックイーン。サイレント映画のスター、バスター・キートンへのオマージュ作品などでターナー賞を受賞。

CULTURE & SOCIETY:

地方分権政策のもと、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドへの権限委譲に伴って独自の議会が創設され、新世紀到来を記念するプロジェクトの一環として、ロンドンにミレニアム・ドームとロンドン・アイが開業。そんなロンドンの美しい街並みを背景にした映画「ノッティングヒルの恋人」が大ヒットし、スパイス・ガールズのヴィクトリア・アダムスとサッカー選手デヴィッド・ベッカムの結婚がゴシップ欄を騒がせた。

開催
概要

テート美術館

YBA & BEYOND

世界を変えた90s英国アート

British Art in the 90s from the Tate Collection

2026.2.11 WED - 5.11 MON

休館日: 毎週火曜日 ※ただし5月5日(火・祝)は開館

開館時間: 10:00-18:00 ※毎週金・土曜日は20:00まで
※入場は閉館の30分前まで

主催: 国立新美術館、テート美術館、ソニー・ミュージックエンタテインメント、朝日新聞社

新 国立新美術館

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

企画展示室2E

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2



Organised in collaboration with Tate



交通案内

東京メトロ千代田線乃木坂駅青山霊園方面改札6出口(美術館直結)
 東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩約5分
 都営地下鉄大江戸線六本木駅7出口から徒歩約4分
 ※美術館には駐車場はありません。周辺にある有料駐車場をご利用ください。

お問い合わせ | Inquiries

050-5541-8600(ハローダイヤル) / +81-47-316-2772 (Hello Dial)
 美術館HP: <https://www.nact.jp>

※ チケット情報につきましては、後日展覧会公式サイトでお知らせします。
 ※ Please check the exhibition website for ticketing information.

【巡回情報】2026年6月3日(水)～9月6日(日) 京都市京セラ美術館



@ybabeyond

展覧会公式サイト: <https://ybabeyond.jp/>
 Exhibition website: <https://ybabeyond.jp/>



テート美術館 — 「YBA & BEYOND 世界を変えた90s英国アート」

東京展の広報に関するお問い合わせ

テート美術館 — YBA & BEYOND 広報事務局 メールアドレス: ybabeyond@ohanapr.co.jp 受付時間: 平日 10:00-17:00